地域立脚型グローバル・スタディーズ

――その成果と展望――

村 井 吉 敬（むらい よしのり）

はじめに
Ⅰ　地域立脚型グローバル・スタディーズ（AGLOS）とは？
Ⅱ　制度的展開
Ⅲ　さまざまなシンポジウム，ワークショップ
Ⅳ　研究面での展開と批判
むすびにかえて

は じ め に

ボーダーを越えて，カネが巡り，モノが動き，人が移動し，情報が駆け巡る，しかもかつてない規模で。いまのグローバル化の速さと規模は，大航海時代の比ではない。帝国主義の時代もボーダーの壁はずっと高かった。インドネシア最東端パプア奥地でもソーラー発電装置が動き，衛星TVでCNNもアルジャジーラもみることができる。キリスト教化されたビアク島のはずれの小島でも，子どもがビン・ラディンTシャツを着ている。大越境時代・グローバル化時代に「地域」と「グローバル化」の作用・反作用を問いつめ「地域立脚型グローバル・スタディーズ」を構築しよう，というのが上智大学21世紀COEプログラム「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」（AGLOS=Towards Area-Based Global Studies）の課題である。

AGLOSは2004年12月４～５日に，「拡散する紛争と難民――グローバリゼーションは地球共同体を構築しうるのか？――」という国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムの基調講演において，わたしは，つぎのようなことを述べた。

「人の生命，人の安全，人の居住の自由，とても当たり前の，普遍的な価値がこの世界では未だに実現されないどころか，ますますこれらの価値を否定する事態が世界中で起きている。1990年代から加速化されたグローバル化は，人，モノ，カネ，情報の国境を越えた急速大量な移動を実現しつつある。このシンポジウムは……大きな問題を論じようとしている。わたしはここで，とりわけグローバル化時代の地域紛争と難民，もう少し大きくいえば人の移動，そして開発の問題を取り上げる。いきなり『開発』というタームを出したのは，多くの地域紛争の背後に『開発』という問題が潜んでいるのではないか，と考えるからである」［村井 2005］。

上智大学21世紀COEプログラムが実質的にスタートしたのは2002年暮れのこと，そして終了したのは2007年３月で，上記シンポジウムは４年半のCOEプログラムのほぼ中間の地点で行われたものである。

上記のように，わたし個人としては「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」を，地

域（の開発問題）とグローバル化の絡みを考究する良い機会であると考え，それに関わってきた。「地域とグローバル化」は，おそらく地域研究者としては避けて通れぬ問題としてある。ここでは，そもそも「地域立脚型グローバル・スタディーズ」とは何なのか，この枠組みのなかで何がなされてきたのか，何をなしえなかったのかを含めて今後の展望を述べてみたい。

Ⅰ　地域立脚型グローバル・スタディーズ（AGLOS）とは？

1．グローバル・スタディーズ

わたしたちが「グローバル・スタディーズ」なる学問分野を視野に入れ始めたのは，上智大学外国語学部および大学院外国語学研究科の再編過程と軌を一にしている。その経緯をここで詳しく述べることはできないが，簡単にいうと，グローバル化の急速な進展は，これまで国民国家を前提として成り立ってきた「外国学」とか「国際関係学」という概念そのものを根底から揺さぶりつつあり，それに対応した新たな学問分野の措定と，それに見合った学部・大学院教育を展開すべきであるとの問題意識である。それにもとづいて，外国語学部においては，従来の6語学科，国際関係副専攻，言語学副専攻，アジア文化副専攻という教育体系を，地域研究とグローバル・スタディーズを視野に入れて再編することになった。大学院では，従来の国際関係，言語，比較文化，地域研究の4専攻から，言語を切り離し，新たにグローバル・スタディーズ研究科を立ち上げるというものであった（これは2006年度から実施，後述）。

「グローバル・スタディーズ」を名乗る大学院・研究所は，1990年代から海外で次々と設置されてきている。アメリカやイギリスに始まり，現在では世界各地の大学に開設されている(注1)。また，従来の国際研究・国際関係論大学院が新たにグローバル・スタディーズ課程を増設するケースも多くみられる。2000年には国際学会として「グローバル・スタディーズ学会」（Global Studies Association）が設置され，多くの研究所や大学院が参加している。

グローバル・スタディーズとは，20世紀末以降新たに登場し，あるいは従来よりあった問題であったにせよ，新たな認識のもとに取り組むことが求められている地球規模の諸問題群（グローバル・イッシューズ）に対応する新しい学問分野である。よくいわれるグローバル・イッシューズには，食糧問題，人口問題，感染症問題，麻薬問題，平和構築問題，人道的介入論，人間の安全保障論，国際労働力移動問題，人身売買，国際買売春，テロ問題，難民問題・域内避難民（IDP）問題等々があげられている(注2)が，それら諸問題の根源を問わぬ限り，いくらイッシューを並べ立ててみても「学」にはたどりつかないであろう。

そこでグローバル化とはそもそも何なのかの議論が必要になる。細かな展開は省くが，わたしは，グローバル化をひとまず「モノ，カネ，技術，情報，人のこれまでの境界（とりわけ「国境」）を越えた急速な自由移動（市場経済の進展）のプロセスとその結果生じるさまざまな事態」と定義しておく。しかしそれだけでは不十分である。担い手は誰かという問題が抜け落ちている。やや大胆にいってしまえば，わたし個人としては，グローバル化は，イデオロギー的には新自由主義に依拠し，その主要な推進者は多国

籍企業，IMF／世銀／WTO（3 Sisters）であるととらえている。このグローバル化のイデオロギーと担い手については，AGLOSの最終シンポジウム（2007年1月13日に開催，後述）においてもかなり重要な議論があった。AGLOS事業推進担当者の1人の中野晃一（国際教養学部，政治学）は，「グローバル化するナショナリズム――日本を事例として――」という報告のなかで，グローバルな市場・自由経済化は，天災がどこからか降ってわいてくるような現象ではなく（自然主義ではないということ），政治的な反自由主義が，それを意図的権力的につくり出している，つまり政治現象としてのグローバル化が進行しているという点を強調した。グローバリゼーションの担い手（中野は「エージェント」というタームを使った）の議論はこれまで政治権力の脈絡であまり語られてこなかっただけに，この問題提起は今後も議論されねばならないと考えている。

2.「地域立脚型」の意味するところ

わたしたちはCOEプログラムのなかで，グローバル化一般を解明するグローバル・スタディーズを目指したわけではない。むしろ重要なのは「地域立脚型」（area-based）を冠したグローバル・スタディーズの提唱にある。それはわたしたち事業推進担当者約20名(注3)の多くが地域研究者（アジア，中東，中南米，ヨーロッパと広い地域におよぶ）であるという便宜的理由によるところも多いが，それ以上にグローバル・スタディーズを真に成り立たせるためには，地域研究がそもそもベースになるべきである，との本質的な議論があったからである。

わたしたちが課題として設定した「地域立脚型グローバル・スタディーズ」とはつぎのようなものである。

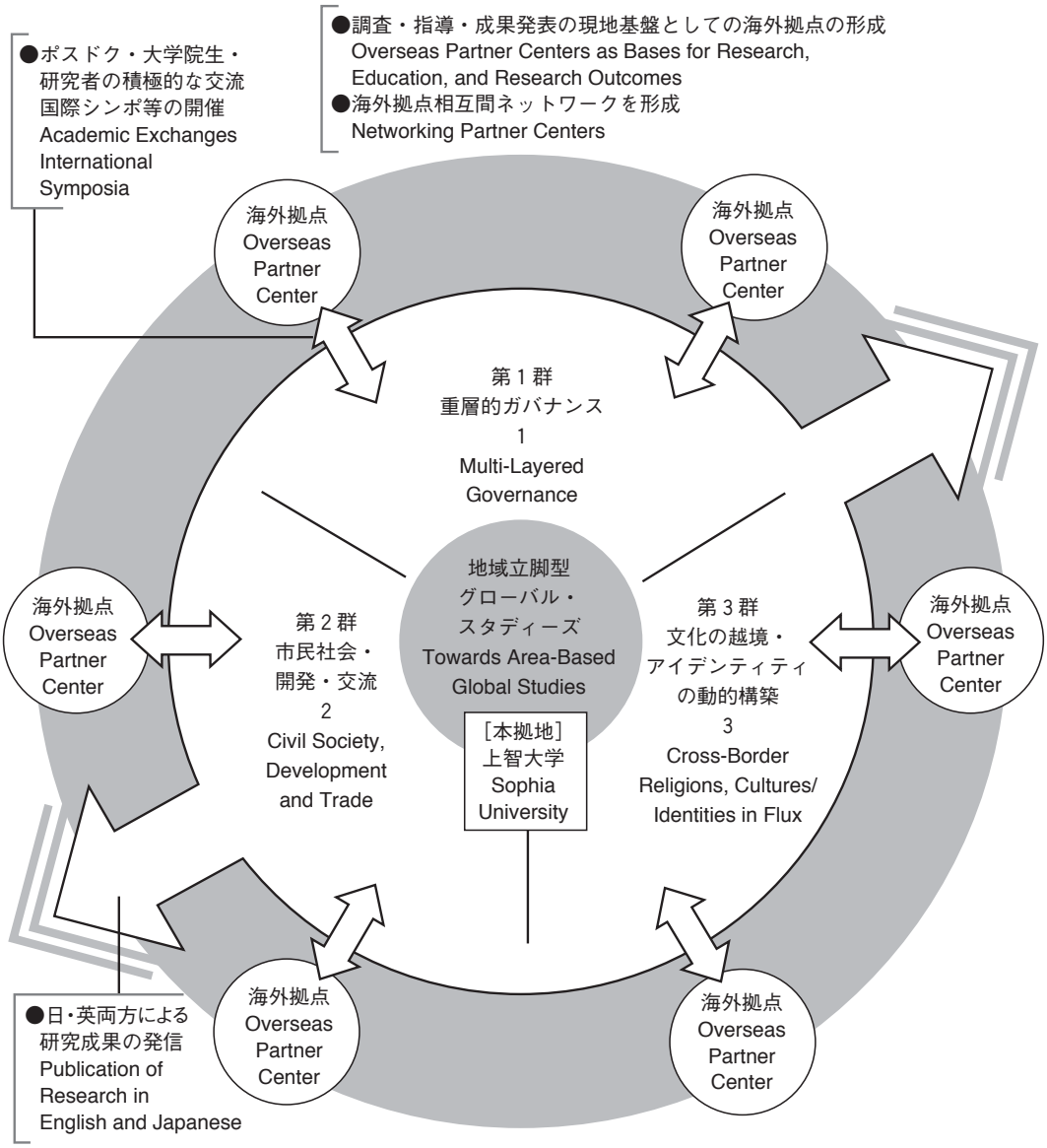
「地域立脚型グローバル・スタディーズとは，政治・社会・経済・文化面での様々なグローバルな動きと地域社会・歴史との間の相関関係を対象とする研究・教育プログラムです。グローバル・スタディーズそのものは欧米を中心に近年世界各地の大学において取り上げられていますが，AGLOSでは，特に日本・アジアに根差しアジア・中東・ラテンアメリカなどにおける地域固有性を重視する立場から，グローバルな流れを解明することを目指します」［AGLOSウェブサイト＜AGLOSについて＞］。

このグローバル化と地域社会との相関関係に焦点を置いた本計画は，政治的（political），社会経済的（socio-economic），文化的（cultural）側面から以下の3群で構成された。無論，グローバル化に起因する諸現象は，地理的な越境を特徴とするだけでなく，その解明のためにもグローバル（包括的）なアプローチを必要とすることから，各研究群内においては学際性を重視し，3群の事業推進担当者は密接な連携を保ち研究計画を実施することになった（図1参照）。

(1) 第1群「グローバル化のなかの政治――重層的ガバナンス――」

グローバル化の進展は，国民国家を中心とした従来の統治秩序を揺さぶっているが，このことはグローバルな単一秩序の到来と国民国家の消滅には結びつかず，むしろ個々の地域固有性を強く残した形で，地域ごとに不均一な重層的ガバナンスへと向かう。地域固有性と重層性をキーワードに，紛争・統合・秩序構築・民主化といったガバナンス問題の諸相を解明する。まずは世界（global），地域圏（regional），国家（national），地方社会（subnational）の各レベル

図1　AGLOS（地域立脚型グローバル・スタディーズ）概念図



（出所）AGLOSウェブサイト＜AGLOSについて＞。

でのガバナンス構築の問題を究明し，次いで各レベル間の相互関連に焦点を絞り地域ごとの重層的ガバナンスの理解を目指す。こうして解明された新しいガバナンス像から，従来の欧米主導のグローバル化の理解に代わる，地域立脚型グローバル・スタディーズを提示する。

(2) 第2群「グローバル化のなかの社会・経済――市民社会と開発・交易――」

グローバル市場経済の進展は，世界中で新たな軋轢を生み出しているが，殊に発展途上国の社会と経済への影響は甚大である。上智大学では，かねてより鶴見和子氏による「内発的発展モデル」の提唱を起点に地域立脚型発展像を追究してきたが［鶴見・川田 1989；1996など］，近年では広く学界において社会発展重視・人間中心の開発モデル・女性と開発（WID/WAD）などが模索されている。わたしたちは，これらの理論の国際規模での精緻化を目指すとともに，とりわけ東南アジア・中国・中東・ラテンアメリカの諸地域での学際的実証研究をもとに，グローバル化時代の新たな地域立脚型発展像を日本より世界に発信することを目指した。この過程で，ともすれば西洋中心主義的な視点からのアプローチが目立った従来の市民社会論や近代経済ネットワーク形成の理解も見直すことになる。

(3) 第3群「グローバル化のなかの文化――宗教・文化の越境とアイデンティティの動的構築――」

文化のグローバル化を暗黙裡に西洋化と同一視する傾向を批判するのに，外来文化を受容する過程での土着化を指摘するのみではもはや充分ではない。本群の研究ではむしろ，地域に立脚した精密な研究によって，西洋中心主義的解釈の根源的修正を迫るのみならず，新たな次元で達成されようとする越境的，超地域的営為をこそ積極的に問題とする。いわゆる世界宗教が，土着化の果てに普遍性を再獲得しようとする現代の運動や，古の伝統へ遡及しつつ，西洋を優位とする文化受容を攪乱しようとする多様な文化発信が注目される。それは，近代的秩序のうちに惹起される文化的多様性と国民統合の葛藤を分析しつつ，アンコール遺跡国際調査のように，地域性の尊厳と全人類的共有の調和を図る研究であり，ひいてはグローバル・スタディーズにおける「文化」概念の再構築を目指す研究である。

Ⅱ 制度的展開

1．グローバル・スタディーズ研究科の新設

以上のような構想でAGLOSは実施されてきた。つぎに教育面でどのような成果があったかを概観する。21世紀COEプログラムでは，研究面とともに，若手研究者の育成が主要課題であった。

制度的には，すでに述べたように，外国語学研究科はグローバル・スタディーズを中心に再編され，本研究計画に根差した持続的な研究者養成を行うことを構想してきたが，2006年度にはグローバル・スタディーズ研究科が開設されることになった。とくに比較文化専攻はグローバル社会専攻として再編され，地域立脚型グローバル社会研究コース，国際経営開発学コース，比較日本研究コースの3コースが設置されることになった。この地域立脚型グローバル社会研究コースはCOEプログラムとまさに同時並行で開設にこぎつけたものである。特筆すべきこ

とは，研究科横断型「地域立脚型グローバル・スタディーズ」プログラムが新設され，今後，「地域立脚型グローバル・スタディーズ」が継続的に発展していくことが期待されている。

2．若手研究者の育成

AGLOSの目的のひとつは，大学院生とくに博士後期課程に在籍する学生および博士課程満期退学者等のいわゆる若手（次世代）研究者による研究活動を支援し，博士論文完成へと導き，また，ポスドクの研究活動を支えることにあった。この面でわたしたちは，つぎのようなプログラムを進めてきた［*AGLOS News*, No. 10］。

①研究助手として採用：研究科に21世紀COEプログラム研究助手のポストを各年次に２つ設け，公募により助手を採用した。助手の任期は１年だが，場合によっては２年まで更新可とした。これにより2003年度から2006年度までの４年間に５名が助手として採用され，それぞれ研究に従事する一方でAGLOSの活動を支えてくれた。５名のうち３名は助手の任期満了後，本学（１名），他大学（２名）に専任教員として採用され，１名は日本学術振興会特別研究員（PD），１名は本学の研究所研究員として研究を継続している。このほか，日本学術振興会特別研究員（COE）を２名受け入れた(注4)。

②若手研究者の研究支援：博士課程後期在籍者その他の若手研究者のなかから毎年度公募により「AGLOS若手研究者」を採用し，各自の研究計画にもとづき主として海外でのフィールドワークや資料調査のための旅費等を５年間で延べ54名に支給した。年度によっては募集枠に対して応募者数が３～４倍になったが，博士論文を完成させる上で重要な支援プログラムとなった。

③若手研究者による国際ワークショップ：AGLOSでは年に１度（秋または冬）「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」にかかわる国際シンポジウムを行ってきたが（後述），毎年その２日目には大学院生らが主体となって組織，運営するワークショップを開催した。当初は国際シンポジウムに海外から招聘した研究者をワークショップに招き，議論や質疑応答を行うという形式で行われたが，後には若手研究者らが設定したテーマにそって，他大学の院生を含む若手が研究発表を行い，国際シンポジウムのために来日した研究者らがコメンテーターを務めるという形式で進められた。使用言語は英語である。コメンテーターらは事前に若手研究者のペーパーを読み，ワークショップでは懇切丁寧に批評し助言した。このようにAGLOSでは大学院生主体のワークショップに教員が協力するという運営方式を生みだした。

④若手研究者の成果をワーキングペーパーとして出版：AGLOSではセミナーや海外での国際シンポジウム等の研究成果の一端をワーキングペーパーとして出版（全15号）してきたが，とくに若手研究者の研究成果の刊行を重視した(注5)。

⑤海外のシンポジウムで若手研究者が発表：先述のようにAGLOSでは４年半の間に９回，海外の研究教育協力拠点および大学，研究所等と協力して国際シンポジウムを開催し，いずれの場合にも若手研究者が研究発表を行う機会が設けられた。

⑥若手研究者が研究プロジェクトに参加：AGLOSでは当初の研究計画にそって事業推進担当者に加えて学内外から研究協力者を得て，10をこえる研究プロジェクトを推進してき

た。これらのプロジェクトではとくに大学院生等の若手研究者の参加を奨励し，海外におけるフィールドワークに参加する機会を提供した。こうした若手研究者らの研究成果の一部は「地域立脚型グローバル・スタディーズ叢書」（後述）で公刊される。

⑦若手研究者のセミナー：最終年度の2006年度には若手研究者の研究成果を公表するための特別セミナーを６回にわたり開催した。各回とも学内外から招聘したコメンテーターによる批評を受ける機会を提供した。

Ⅲ　さまざまなシンポジウム，ワークショップ

AGLOSの研究の深化と成果を問う国際シンポジウムが毎年開かれた。著名な海外の研究者や実践家を招待し，グローバル・スタディーズの最前線の議論がそこでは展開された。また海外の拠点（カンボジア・シェムリアップなど）でも国内でもさまざまなシンポジウムやワークショップが開催されてきた。ここではごく簡単に，過去に開かれたシンポジウムを振り返ってみる。

１．「AGLOSグローバル・スタディーズ・シンポジウム」

①「対立か収斂か――グローバル化とローカリティ――」（Conflict or Convergence? Regions in a Globalizing Age）［問題の設定，提起］，2003年３月15～16日開催。
基調講演：サスキア・サッセン（Saskia Sassen，シカゴ大学教授，社会学）。

②「地球規模の政治社会に向かって――21世紀におけるグローバルな規範――」（Prospects and Challenges for the World Polity：Global Norms in the Twenty First Century）［政治面でのグローバル化］，2003年12月６～７日開催。
基調講演：ジョン・マイヤー（John Meyer，スタンフォード大学名誉教授）。

③「拡散する紛争と難民――グローバリゼーションは地球共同体を構築しうるか――」（Expanding Conflict and Refugees：Can Globalization Construct a Global Community?）［社会経済面でのグローバル化］，2004年12月４～５日開催。
基調講演：村井吉敬（上智大学）。

④「宗教を消費する――グローバル化時代の信仰のかたち――」（Consuming Religion：Globalization and Popular Beliefs）［文化宗教面でのグローバル化］，2005年11月19日～20日開催。
基調講演：「宗教施設の商品化とその限界」大塚和夫（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）。

⑤「『グローバル』を視る・生きる――共同体理念再考――」（*Re*framing the World：Globalism, Nationalism, Fundamentalism）［総括シンポジウム］2007年１月13日開催。
基調講演：「S. J. マグダレーナ川中流域開発と和平プログラム」ハロルド・ジェイムズ（Harold James，プリンストン大学），フランシスコ・デ・ルー（Francisco de Roux）。

これらの国際シンポジウムは，上記のように，①問題提起・枠組みの設定から始まり，②政治面でのグローバル化，③社会経済面でのグローバル化，④文化宗教面でのグローバル化そして⑤総括をテーマとしてきた。特徴的なことは，

上記にはお名前を出していないが，欧米主流のグローバリゼーション理論に対して，第三世界や日本から参加していただいた多数の講演者やディスカッサントから，果敢な挑戦や疑問が提起されてきたことである。これらの議論については，*AGLOS News*のNo.1～No.10に掲載されているので参考にしていただきたい。

2．カンボジアでのシンポジウム

AGLOSの有力な海外研究教育拠点にカンボジア・シェムリアップの上智大学アジア人材養成教育センター，Sophia Asia Center for Research and Human Development がある。石澤良昭学長（前拠点リーダー）のイニシアティブで，ここでもさまざまなシンポジウムやワークショップが開かれた。それは考古学を越え，地域立脚型グローバル・スタディーズの発想のもとに開催されている。おもなシンポジウムは以下の通りである。

①「カンボジア・シェムリアップより――地域から発信するグローバル・スタディーズの方法論構築――」（Towards Area-based Global Studies : First Steps from Siem Reap, Cambodia）於シェムリアップ，2002年12月27日～29日開催。

②「文化遺産とアイデンティティとIT――アンコールワットと３次元技術の活用――」（Cultural Heritage, Identity and Information Technology : Angkor Wat and the Use of Three Dimensional Digital Imaging Technology），2004年３月12日～14日開催。

③「カンボジア版地域自立型発展は可能か――小さな民と農民の声を発信させよう――」（The Possibility of the Development at Cambodia-Style Regional Autonomy? The Voices of Farmers and Other Rural Folk），2005年２月21日～22日開催。

④「文化遺産と環境と観光――アンコール・ワットを護る国際支援――」（Cultural Heritage, Natural Environment and Tourism : International Contributions on Angkor Wat），2005年12月31日開催。

3．その他の海外シンポジウム

①エジプト「グローバル化へのそれぞれの視点　日本とエジプト――イスラーム，紛争，グローバル化――」（Regional Views on Globalization in Egypt and Japan : Islam, Conflict and Globalization），2004年３月６日開催。

②ブラジル「地域から読み解くグローバル化」（Globalization : From the Local Perspective），於サンパウロ大学，2005年３月４日開催。

③メキシコ「グローバル化時代のアジア太平洋圏――政策・生産・消費ロジックの変化――」（Pacific-Rim in a Globalizing Age : Changes of Political Logics, Value Chains and Peoples' Lives），2006年３月１日～２日開催。

④中国「グローバル化のなかの地域再考――比較の視座からみた山西省――」（Rethinking Locales in Globalization : Shanxi Province in Comparative Perspective）2006年８月31日～９月１日開催。

4．国内でのシンポジウム

①「紛争から復興・開発支援へ――地域研究から実践へ――」（Between Knowledge and Commitment : Post-Conflict Peace Building and Reconstruction in Regional Contexts）2003年１月17日～19日開催。

②「グローバル化とアジアの新しい貧困」（Globalization and Asia's New Poverty : Five Years on from the Asia Currency Crisis）2003年３月８日開催。

③「グローバル化の中のインドネシア」（Indonesia in a Globalizing Age : Reflections on Reform and Democratization in Post-Soeharto Era）2003年５月31日開催。

④「現代イスラームをめぐるテロリズムの背景と現状を考える」（Terrorism in Contemporary Islam : Its Background and Current Situation）2005年１月22日開催。

⑤「人権・女性・紛争――アジアにおける日本を考える――」（Human Rights, Women, and Conflicts : What Should Japan Do in Asia and Beyond ? ）2005年６月３日開催。

⑥「アジアにおける日本を考える――『グローバル・アイ・オン・YASUKUNI』――」（Global Eye on YASUKUNI）2005年12月14日開催。

ただの羅列に終わったが，AGLOSはシンポジウムやワークショップを開いてばかりいたのではない。これらの諸会議のための日常的な研究の積み上げが基礎にあったことはいうまでもない。

Ⅳ　研究面での展開と批判

わたしたちの最終的な目的は，いうまでもなく「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」である。前述した「日本・アジアに根差しアジア・中東・ラテンアメリカなどにおける地域固有性を重視する立場から，グローバルな流れを解明すること」が本当に達成されたかどうかは今後の評価をまたねばならない。しかしながら，21世紀COEプログラム委員会による中間段階の評価は厳しい内容であった。そこでは，「拠点のプログラム名である『地域立脚型のグローバル・スタディーズ』とは何か，『グローバル化のもとにおける地域研究』とはどこが違うのかなどが未だ明白ではなく，また，カンボジアは別として，他の大学における地域研究に比しどこが特徴であるかも，まだ見えてこない。したがって，当初計画を練り直し，グローバル・スタディーズの概念を明確にしたうえで，地域研究からそれを構築する方向を強く考え，それを進めるなどの方法によって，拠点形成を進めることが肝要であり，その線に沿った具体的な成果を挙げられたい」と述べられた［日本学術振興会 2003］。

そもそも採択されたプログラムについて，当初計画の練り直しや，概念の明確化を求めるということ自体，本来ありえぬことで，評価そのものが受け容れ難いものと考えた。ここでその問題を蒸し返すことはしないが，根源には，地域研究やグローバル・スタディーズに対しての既存の学会サイドからの無理解があるのではないかと思われる。

わたしたちは当初から「地域研究」や「グローバル・スタディーズ」，そしてそれらに依拠した「地域立脚型グローバル・スタディーズ」は，物理学や経済学という，既存の学問体系と同次元の理論体系をもちうるものだとは思っていなかった。それはそもそも学際的な研究領域でしかありえないし，地域に根ざした研究が重視されるべきだと考えてきた。その立場から，評価委員会側に，以下のような，わたしたちの

立場を伝えた。

「『グローバル・スタディーズ』とは，単にグローバル化を『計測』する学問ではない。『グローバル化』そのものも，あたかも特定の物質であるかのように実体論的に捉えられる嫌いが一般にあるが，交通通信技術および情報技術の進歩によってもたらされた地球大の諸変化とそれに由来するさまざまな影響・作用などの諸現象が便宜的にそのように総称されているものであるにすぎない。そうした影響・作用は，それぞれの地域が地球上で占めている地理的および政治経済的・文化的位置にしたがい多様であり，またそれぞれの地域が特有の文化的視座ないし世界認識を有している以上，たとえ作用が同じであったとしてもその理解やそれに対する反応は一様ではありえない。したがって，『グローバル・スタディーズ』とは，それぞれの地域において表面化する現象面での諸変化の把握にとどまらず，それぞれの地域におけるそうした諸変化に対する理解のあり方ならびに諸変化に対する反作用の顕れ方を視野に収め，ある地域の論理と別の地域――支配的な地域という意味で通俗的な『グローバル』の用語を適用できるような設定の『地域』でもありうる――の論理との相互作用を可視化するものである。その意味で本拠点が措定する『グローバル・スタディーズ』は，本来的に『地域立脚型』である」。

つまり，グローバル・スタディーズという単一ディシプリンは，地域の立場に立つ以上ありえない，地域のさまざまな人間の営みや自然生態環境からグローバル化に迫ることこそが複合・学際分野における学の構築に他ならないとの立場であり，それはこのプログラムが終わった今日の時点でもいいうることであると考えている。欧米起源のグローバル・スタディーズを，地域，あるいはアジア・中東・中南米などから問い直し，鍛え上げていくのが地域立脚型グローバル・スタディーズの構築に他ならないとの立場である。

むすびにかえて

2007年１月13日に，前述の最終シンポジウム「『グローバル』を視る・生きる――共同体理念再考――」（*Re*framing the World：Globalism, Nationalism, Fundamentalism）が開催された。ここでは，プリンストン大学のハロルド・ジェイムズ教授(注6)と，コロンビアのNGOで活動するフランシスコ・デ・ルー神父による基調講演がなされ，AGLOS側からはリンダ・グローブ，中野晃一，私市正年の３名がAGLOSの視座を語った。

いずれの論者にも共通していたのは，地域に立脚してグローバル化を観察する限り，グローバル化は，歴史的な危うさを抱えており，その西欧的な，というより帝国主義的ともいえる世界各地域への攻勢，さらには紛争や戦争をも引き起こしている内部矛盾を抱えているということであった。その上で人間の尊厳や倫理の重要性が語られた。また，グローバル化を推進する政治権力構造（政治的反自由主義）が重要な視座であることが語られた。わたしたちに残された大きな課題に，グローバル化で地域概念そのものが揺れ動いているなか，あらためて，そもそも「地域」とは何なのかという問題がある。グローバル化の通常の解釈である「越境」は，国家を越える動きとだけとらえられているが，地域概念の再検討とともに，越境そのものを地

域や人びとの視点から大胆に再検討していくことの必要性が痛感される。そして「地域」にはグローバル化を推進する勢力（その依拠するエージェンシーとアイデンティティ）もあれば，反対する勢力もあり，地域自体一様でないとの当たり前の前提に，わたしたちはやはり立たされている。「地域に立脚する」ということを正面から考えグローバル・スタディーズの再構築に取り組んだ結果，「地域」概念自体を「アイデンティティ」と「エージェンシー」の２つの分析枠組みとして問い直すこととなり，新たに「地域内地域」研究と「グローバル化する地域」の研究という２つの将来的な学術的な方向性が提示されるところとなった。

COEのめざす「世界最高水準の拠点」としてひとつの学問領域を構築しえたかについては今後の評価をまたざるをえないが，この意味で，2007年２月にカリフォルニア大学サンタバーバラ校においてグローバル・スタディーズの推進と世界的拠点間の交流・協力を目的に国際会議が開かれた際，わたしたちの拠点が招聘を受けたことは，本計画が海外の第三者からみても，それなりの成果を挙げたことを示唆していると思われる。

この国際会議には，世界中から12大学（アメリカ・デューク大学，中国・復旦大学，韓国・漢陽大学，イギリス・LSE，ドイツ・ライプツィッヒ大学，南アフリカ・ステレンボッシュ大学など）が参加した。そのなかで，グローバル・スタディーズ研究科の開設により国際的に最高水準の教育研究拠点を実現したと認められた本拠点が，今後コンソーシアムを立ち上げるに際してリーダーシップを取ることを要請される結果となった。その意味で，海外拠点を含む国際ネットワークの整備を進めつつ，海外諸国のグローバル・スタディーズ大学院との連携を目指した本拠点の目的はこのように十全に達成されたといえる。

最後に，わたしたちの包括的な研究成果は，「地域立脚型グローバル・スタディーズ叢書」（全６巻・上智大学出版）として順次公刊計画が進められていることを述べておきたい(注7)。

（注１）「グローバル・スタディーズ」大学院・研究所のおもな例としては，スタンフォード・ウィスコンシン・ミネソタ３大学合同大学院プログラム（アメリカ），イェール大学国際・地域研究センター（アメリカ），ハワイ大学グローバル化研究所（アメリカ），インディアナ大学地球規模変化研究センター（アメリカ），ウォリック大学グローバル化・地域化研究センター（イギリス），マンチェスターメトロポリタン大学グローバル・スタディーズ研究所（イギリス），マクマスター大学「グローバル化と人間」研究所（カナダ），ミュンヘン大学グローバル・スタディーズ・プログラム（ドイツ），アルバート＝ルードウィッグス（ドイツ）・ナタール（南アフリカ）・ジャワハルラル＝ネルー（インド）３大学合同グローバル・スタディーズ大学院，などがあげられる。

（注２） 外務省は『ODA白書』（2006年版）のなかで，グローバル・イッシューをつぎのように述べている。「地球温暖化をはじめとする環境問題，感染症，人口，食料，エネルギー，災害，テロ，海賊，麻薬，国際組織犯罪といった問題は，一国だけの問題ではなく，国境をこえた地球的規模の問題であり，人間の生存に関わる脅威となっています」。

（注３） 事業推進担当者（専門分野）は，以下の通り（順不同）。岸川毅（比較政治学，ラテンアメリカ），中村雅治（政治学，ヨーロッパ地域），野宮大志郎（社会学），川口和子（国際法社会学），Sorpong Peou（国際政治学，カンボジア），安野正士（国際政治学），加藤浩三（政治経済学），中野晃一（政治学），三浦まり（政治学），私市正年（歴史学，マグリブ諸国），小林宏光（美術史，中国），Linda Grove（歴史

学，中国），谷洋之（経済学，ラテンアメリカ），三田千代子（社会人類学，ブラジル），下川雅嗣（国際経済学，東南アジア），幡谷則子（社会学，コロンビア），村井吉敬（社会経済学，インドネシア，95年以降拠点リーダー），赤堀雅幸（人類学，エジプト），寺田勇文（文化人類学，フィリピン，事務局長），Mark Mullins（宗教社会学），石澤良昭（歴史学，カンボジア，94年まで拠点リーダー），John Clammer（社会学，東南アジア），James Farrer（社会学，中国），David Wank（社会学，中国）。

（注４） AGLOS若手研究者が職を得た機関には，金沢大学，名古屋市立大学，清泉女子大学，立命館アジア太平洋大学，上智大学，プノンペン王立芸術大学，文化遺産国際協力センターなどがある。

（注５） たとえば，福武（2003），Tatsumi（2005）などがある。

（注６） 著作に，ジェイムズ（2002）がある。

（注７） 各巻のタイトル（仮題を含む）は以下の通りである。

第１巻『グローバル社会――理論と展望――』

第２巻『トランスナショナル・ネットワークの諸相――生産・流通・消費――』

第３巻『貧困・開発・紛争――グローバル／ローカルの相互作用――』

第４巻『グローバル化の中の宗教文化――グローバルな移動／ローカルな信仰――』

第５巻『グローバルな規範／ローカルな政治――民主主義の行方――』

第６巻『グローバル／ローカル――文化遺産――』

文献リスト

＜日本語文献＞

ジェイムズ，ハロルド 2002.『グローバリゼーションの終焉――大恐慌からの教訓――』（*The End of Globalization*, 高遠裕子訳）日本経済新聞社.

鶴見和子・川田侃編 1989.『内発的発展論』東京大学出版会.

――― 1996.『内発的発展論の展開』筑摩書房.

日本学術振興会 2003.『21世紀COEプログラム　平成14年度採択拠点　中間評価結果』21世紀COEプログラム委員会.

福武慎太郎 2003.「ある難民少女の物語――紛争後の東ティモールにおける人権運動の批判的考察――」AGLOSワーキングペーパー.

村井吉敬 2005.「開発・紛争・難民――グローバル化と地球市民社会――」*AGLOS News*, No.7（2005年11月）8-9.

＜英語文献＞

Tatsumi, Yoriko 2005. “Muslim Struggles in an Era of Globalization : A Case Study of Muslims in the Philippines.” AGLOS Working Paper.

＜ニュースレター＞

AGLOS News　各号

AGLOS News, No. 10 寺田勇文「21世紀COEプログラム――AGLOSの５年間をふり返って――」.

＜インターネット＞

AGLOSウェブサイト http : //www.aglos-sophia.jp/jp/index.html

――― ＜AGLOSについて＞http : //www.aglos-sophia.jp/jp/about/index.html

外務省『ODA白書』 2006年版 http : //www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hakusyo/06_hakusho/ODA2006/html/

（上智大学教授，上智大学21世紀COEプログラム拠点リーダー）